

史料報

第 21 号

昭和49年10月

明治期の学校日誌

——「井上・色川論争」に寄せつつ——

有 泉 貞 夫

(山梨県議会史・教育
百年史編集委員)

二〇年振りに郷里の山梨へ戻り、県の教育百年史の編纂を担当して史料集めを仕事とするうちに、町村の小学校文書の中に狭義の教育史料にとどまらない内容をもつ史料があることに気づいた。それは明治期の小学校の日誌である。これは明治十年代なかば以降はどこでも作成記述することが義務づけられていたらしいが、これをもとにしてその学校で時折「学校沿革誌（永久保存）」がまとめられると、日誌の方は御用済みとして放棄されたところが多かったらしい。最近学校創立百年の記念誌を編纂した県内の百近い学校に照会を出したが明治期の日誌がまとまって残っていたのは数校しかなかった。記載事項は様式が整う明治末には

とところが明治期を通じて、小学校の管理運営上最大の課題は学齢児童の就学率・出席率を向上させることであつたので、これを妨害する事象について日誌は当然触れることになつた。かくして浮かび上つて来るのが村の習俗と学校との関係である。早速具体例として、これまでに出版した日誌の内年代の早い明治十四年五明学校（中巨摩郡）の一二月の記事を抜萃して見よう。

一月二十八日 本日ハ旧十二月廿九

目 次

明治期の学校日誌——「井上・色川論争」に寄せつつ——……………有泉貞夫……………(1)
「藤沢市文書館」の現状と課題……………高野修……………(5)
近江湖東農村史料からみた名目金の事……………(5)

例——鏡村庄屋日記より——鶴岡実枝子……………(7)
旗本文書館の所在調査について……………(10)
受贈図書目録・新取史料紹介・彙報……………(14)
講習会関係記事等……………(14)

日ニ当リ昇校生徒僅カ十二、三人

同二十九日 旧十二月大晦日且通

寒（数日前の残雪のため）旁昇校生徒前日ニ同ジ

同三十日 本日陰暦元日ニ当リ旁

昇校生徒一円無之候

同三十一日 午后北風烈シ昇校生徒徒前同断

二月一日 旧暦正月三日ニ当リ昇校生徒更ニ無之候

同二日 同四日ニ当リ前同断

同三日 節分ト称シ昇校生徒徒前同断

同五日 午後北風アリ本日ハ旧正月七日ニ当リ所謂送り正月ト称シ出席生徒僅カ十四人

同七日 出席生徒五十四人

同十一日 紀元節休校 烈風アリ

同十二日 午後風アリ、旧正月十四日ニ当リ昇校生徒僅カ十五、六人

同十四日 雪降ル殊ニ旧十六日ニ

当リ昇校生徒一円無之候

同十五日 朝霧アリ、前日ノ雪道

路難渋、且素々山神祝日ト称シ出席

生徒僅カ式人

同二十二日 薄曇餘寒甚シ、例年

十日市ニ当リ候故ト相見え昇校生徒僅カ十三人

同二十三日 本日旧暦正月廿五日

ニ当リ所謂天神宮祝日ト称シ昇校生徒僅カ一二、三人ナリ

この時期は学年制が確立した後とは違い、入学・退学者が年中絶えな

いが、五明学校の通常の出席数は六〇〇七〇人程度である。授業は一月

八日から始まっているが、一二月に日曜・国家祝祭日以外に、生徒の

出席皆無あるいは僅少の日が実に一三日もある。

まず旧暦年末年始は完全に休校状態で、それにつづく節分、十四日正月など一連の行事の日にも児童はほとんど出てこない。正月行事がおわるとこの地方での山村と農村の交歓

である十日市日、天神祭と続く。四月に入ると桃の節句、「陰暦三月雛

節句ニ相当、生徒一円無之、何共歎息之至リニ候（四・一）」、つづい

て村祭の日がくる。郷社祭日は当時の小学校規則でも当日は休業となっているが、日誌では前日から跡祭りへと三日間生徒は出て来ず（四・一一・一二）、自村の祭礼日には出てこない教員もいる（三・一四）。このあたとも端午・七夕・祇園祭りに盃蘭盆会、「昇校生徒僅か二名、如何共授業可施様無之、不得止引取（八・一旧七夕）」と校長は歎息の連続である。

この有様は何時まで続くのだろうか。これまでに見ることができた日誌で欠年のないのは豊学校（中巨摩郡）だけしかないが、日清戦争前後までは、この状態が続いているようである。二十六年上野原小学校では生霊祭中、授業時間は一日三時間とすることで生徒の出席を計ろうとしたが、「前日ノ約モ畢境本村習慣ノ勢ニハ敗北ヲ取りシナランカ、昨日ニ引換ヘ意外ノ多数欠席（八・一五）」で十時には閉校となり、翌八月十六日は遂に休校、翌日も保福寺縁日で十一時授業中止となっている。（当時の山梨県内小学校では夏期休暇を六月養蚕繁忙期に振替えている学校が多い）。九月に入り鎮守牛倉神社祭典でも四日から退校児童夥多で十二時閉校、五・七日を休日にして八

日も「祭典ノ翌日ノ為出席生徒僅少ナルニ依リ不得止正午閉校」となり、翌日の日誌は、六日校庭に設けられた若囃の屋台がまだ撤去されないと、校長が役場にねじ込んだいきさつに触れて「噫何夫レ役場ノ冷淡ニ此ニ至ルヤ」と憤懣を記している。

学制頒布から二〇年を経て、村のハレとケのリズムは、学校があらたに持込んだ規律に対抗しつづけた。しかしこの習俗の児童に対する支配力はこの後急速に衰える。

三十六年の豊・上野原小学校の日誌では、もはや祭りの日の登校児童の減少に対する校長の歎きは見られな

い。これから後、登校数減少が記載されるのは旧暦正月元旦の一日、端午節句の午後休校が時折見られるだけで、村祭りも公認の一日休日である郷社祭礼日前後に見られた登校数の著しい減少はなくなる。

この変化は教育史の局面だけにとどまらない意味をもつだろう。正月や村祭りに数日に亘って児童が登校しないことは、このときまで習俗が強固に維持され、児童が行事の不可欠の担い手だったことを示す。日誌も「学区内ノ父兄旧習ヲ脱セス、陰曆窮臘ニ迫ルヲ以テ学徒ノ児童迄応分ノ事ヲ執セシカ為メ昇校スル者僅

少」と記している（豊学校一八・二一）。この状態では明治国家の祝祭日は一般国民は勿論、学校児童の心を抱えることもできない。とくに「紀元節」は旧正月の一連の行事の流れのなかでかすんでしまい、特別な印象を植えつけることも困難だったろう。しかし祭りのために学校を休むのが一日や半日だけとなれば、祭りと児童の関係は変わる。児童は祭りの不可欠のバートを受けもち物忌みに服する共同体成員候補ではなく、単なる「お祭り」の享樂者・見物人でしかなくなる。そのとき学校の国家祝祭日儀礼とこの日に貰う落雁やみかんが子供心に意味をもちはじめのだろう。（拙稿「明治国家と祝祭日」（歴史学研究三四一号）参照）。

日露戦役には小学校にとって村祭りは、いまいましい教育妨害者ではなく、利用すべき教育機会として扱えられるようになる。四十四年四月十二日大明小学校（五明学校の後身）日誌は「本日大井村下宮地神部神社ニ西御幸関係祭アルヲ以テ午後課業ヲ有スル学年児童ハ各担任教師付添ヒノ上参拝ノ為小笠原付近迄出勤ス」と記し、同年秋の若宮八幡社の祭典には「一敬礼 二禊祓 三玉串献上

（校長） 四唱歌（君が代） 五講演（神官） 六敬礼」の順序で参拝式を行っている。

日本近代史に関心をもつもので柳田国男「明治大正史―世相編」に実年代を入れることができたなら、政治史・思想史に新たな展望が開けるのではなからうかと夢想するのは私だけではなからうが、ここに紹介したような学校日誌が広く全国的に比較検討されるなら、明治期における民俗変容の一面を時間的・地域的に小さきみに追ひ比較することができるとも知れない。

しかし、この種の史料も急速に失われかけている。教育百年史の調査を始めて、山梨県下でも小学校舎が最近大部分建替えられてコンクリートの建物に変ったことに改めて気づいたが、「学校沿革誌」と違って必ずしも永久保存とされない日誌やその他の学校文書は、校舎の改築や学校の統廃舎にともない処分される可能性は大きい。府県町村の行政文書とともに学校文書の保存と有効な利用についても関係者の考慮を望む次第である。

〔付記〕

史料館から求められたのは「館報」第十九・二十号に載った井上勝生・

色川大吉両氏の文章に寄せてなにか書くようにとのことであつた。国会図書館憲政資料室でいく年か禄を食んだのだから気のきいた意見でももちあわせているかと見られたのだろう。だが私自身は「史料目録」のあり方について考えたことはなかったので全く困つてしまった。井上氏が云おうとしたのは次のようなことだったらしい。

歴史研究者が一文書（史料群）のなかから必要史料を恣意的に「抜き取り」研究論文作成に利用するような研究状況（＝保存なき研究）が「史料目録」の軽視を生み、文書館・図書館などの文書史料担当者（Archivists）の営みはこれに規定されて、研究なき保存に一面化され、地位待遇も低い水準に固定されて来た。この現状を打破するために、文書史料担当者が同時に研究者であり得るような制度的・予算的保障（しかも身分制導入でないような）を獲得しなければならない。

井上氏はこの観点から、色川氏の信濃史学会大会での発言―文書（史料群）の歴史的個性を損わない目録作成の必要を強調した発言をとらえて、それができないのは「抜き取り」的研究横行のためだと決めつけてい

る。しかし私はこれは見当違いで、近世以降の文書史料目録作成を具体的に方向づけたのは歴史研究者の要請あるいは「都合」よりも、戦後にこれらの史料の収集・保存・閲覧をとにかくも引受けなければならなかった各地の公共図書館の「事情」ではなかったかと思う。この場合、近世文書の図書館への搬入が館員の十分な理解と支持のもとにおこなわれたのでなく、持ちこまれたあとにその公開利用のための文書史料の登録・分類・目録作成の仕事が図書館員に押つけられたケースが少くなかったことを想起する必要があるだろう。図書館員がこれに図書資料を対象として作り上げられた分類・目録法の発想で対処しようとしたのは無理からぬことであつた。一点一点が原則として独立し全体としてはエンドレスな図書資料の収集整理は、はじめに分類表・目録規則がなければ收拾がつかなくなる。この発想が前提にあつたため、分類表作成に当つて歴史研究者の協力が得られた場合でも、それからあとの史料目録作成作業が、文書（史料群）の歴史的個性にふさわしく中味を分類するのではなく、分類表にあわせて史料群を解体することになつてしまひ、井上・

色川両氏が問題にする「生体解剖」的目録を出現させる一つの理由になつたと云えるだろう。そして理由がこれだけならば、その後に経験を重ね利用者の声を聴くことによつて改善可能だし、またその努力も行われて来たと思う。しかしそれが目ざましい成果を上げられなかったとすれば、もう一つの理由が重くのしかかつていたからであらう。

それは図書館・文書館では文書史料を物品管理法（規則）により規制をうける公有財産として管理しなければならぬことについて廻る厄介さである。これは一般図書資料について前から指摘されていたことで、購入図書が増加すれば、物品管理責任のため、およそ面白味のない書類やカードの書き写しの事務量が何倍もふくれ上るという関係が公共図書館発展の桎梏になつて来た。それでも図書館の場合には、高知市民図書館のように大部分の図書資料は消耗品だという発想の転換を市の理事者に承認させて、図書館活動の飛躍的發展の血路を開くことも可能であつた。だが文書史料の場合はこれは出来ない相談である。

もう随分以前から独立の文書館設立促進の声が多く、それらは「図書

館併置の文書館的施設」（館報一九号三浦俊明氏文章の表題）では駄目だということを当然のことのように前提しているが、全くおかしい。

「史料目録」の不出来を規定する第一の理由は図書館併置でも改善可能だが、第二の物品管理について廻る厄介さは、独立の文書館が出来ようと、スタッフが研究職で遇されようと変ることなく、収集の進展にともなう事務量の増加は、史料保存・利用機関の目録作成ほかサービス向上への意欲を圧迫し続けるだろう。それを承知で「史料目録」のあり方を論ずるのは気が進まないで勘弁願ひ、最近の調査で気づいた史料のとりとめもない紹介で場ふさぎをさせていたのだ。なお、私が以前勤務していた場所での史料目録作成についての一般方針は、国会図書館連絡部発行「びぶろす」二二巻九号（一九七二）の「憲政資料室の歩みと現状」に述べてある。目録作成の技術的側面に限るなら、色川・井上両氏の力説するところと変りない。（終）

（編集者からお願ひ）

三号にわたつた三氏の問題提起についてご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

第二十回近世史料取扱講習会開催される

九・十月、仙台・東京二会場で

当館主催の表記講習会は、左記要項により二会場各四〇名の受講者の参加を得て開催され、所期の成果を挙げて終了した。

〔開催要項〕

〔趣旨〕

公共機関などにおいて、近世史料を取り扱う事例の増大に伴ない、これに関する知識技能の向上が要請されている現状にかんがみ、当該関係者に近世史料の読解・調査・集収・整理・分類・保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、近世史料の保存、利用の効果を高める。

〔期間および会場〕

A、昭和四十九年九月九日(月)・九月十四日(土) 宮城県図書館
B、昭和四十九年九月三〇日(月)・十月五日(土) 国立教育会館

〔受講資格〕

図書館・史料館・博物館・研究所・史誌編さん室その他の機関に

勤務し、近世史料の整理および調査研究等に従事している者で、その経験年数の比較的浅い者
(四) 講習題目と講師 (敬称略)

A、仙台会場

- (1) 古代中世史料概論…法政大学文学部教授 豊田武
- (2) 近世史料概論(Ⅰ)…福島大学教育学部教授 小林清治
- (3) 近世史料概論(Ⅱ)…東北大学文学部助教授 渡辺信夫
- (4) 近代史料概論…神奈川大学経済学部教授 丹羽邦男
- (5) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔
- (6) 史料の保存科学…高松塚保存対策調査会委員 岩崎友吉
- (7) 史料読解(幕藩・村方・町方)
- (8) 史料の整理・管理
- (9) 史料の分類
- (10) 近世の遺物と遺習
- (7)・(10)…当館教官担当

B、東京会場

- (1) 古代中世史料概論…東洋大学文学部教授 宝月圭吾
- (2) 近世史料概論(Ⅰ)・(Ⅱ)…東京都立大学人文学部教授 北島正元
- (3) 近世史料概論…宮城教育大学教授 安孫子麟
- (4) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔
- (5) 史料の保存科学…高松塚保存対策調査会委員 岩崎友吉
- (6) 史料読解(幕藩・村方・町方)
- (7) 史料の整理・管理
- (8) 史料の分類
- (9) 近世の遺物と遺習
- (6)・(9)…当館教官担当

二〇回(二四会場)、延べ一、一〇〇人に達する受講者の参加を見ており、近時ますますこの種の講習会開催への期待が大きくなって来ていることを、改めて痛感させられている。

この間、当館では、何よりも、全国の既受講者各位との、日常業務に関する連絡・提携を重視し、本誌等を通じてこれに心がけて来た一方、とくに受講者各位の意見・要望や客観情勢の変化等を検討しながら、随時、講習会の企画・運営について改革をつづけて来た。しかしながら、近時は、とくに各地域の実情や受講者の問題関心等について、さらにきめ細かな検討が必要な情勢の変化が少しづつ起きていることも疑いない。館内では、こうした情勢の変化とこれへの対応の条件を検討しながら、講習会の質・量両面にわたる充実・発展をはかるべく、本格的検討の機会を準備している。近世史料に対する一般の急激な関心の増大は、よりいっそう幅広い啓蒙普及的性格の総合的講習の機会と併行して、各地域・機関の専門職員により高度な専門的相互研修・研究集会も必要としているであろう。各位の、積極的な提案・ご意見をお待ち

本講習会は、旧文部省史料館当時の昭和二十七年から今年まで、途中の三年間中断や館の改組期をはさんで、すでに通算

1 歴史史料と行政資料の保存・利用体系の確立

現在では地域住民の福祉という言葉がかなり普及し、行政上でもいくつかの施策が実現されてきた。そして今や住民福祉を無視した行政は行えないといえよう。

その福祉行政の中の一つとして、私共は行政文書等の住民への公開を考えている。つまり具体例としては、行政資料室・市(県)民資料室といった機関の設置が実際に行われている。

「藤沢市文書館」の現状と課題

高野修
(藤沢市文書館員)

る。

ところでそれらの施設の事は、いたっておそまつで、わずかに刊行物を揃えているという程度で、これの貸出業務に終っている。つまり不完全な形で公開しか行われていないといえよう。

私共はこのような業務の改善のみならず、本来の文書公開の原点にかえて、本格的な行政機関としての位置づけをこれ迄追求してきた。その結果が、藤沢市文書館である。

当館は、歴史史料と行政資料(文書)を集大成したところの「史・資料」の文書館であることを、その特色としている。

当館での歴史史料とは、藤沢市史編さん過程に収集された地方文書・寺社文書であり、市内の百二十余軒約十六万点余が調査され、そのうち十五軒約五万点が文書館に寄託され、保管されている。その成果は「藤沢市史資料目録」として第一・九集としてすでに刊行され、第二次史料の

役割を持つマイクロもすでに約二十一万二千五百コマ撮影し、そのすべてを製本化(A・4)している。

行政資料Ⅱ文書は、現存簿冊(B・5)で約二万五千冊となっているが、そのすべては当館で保存している。もとよりこの保存簿冊の中には、明治以来の文書が多少は残存するけれども、藤沢市役所でたびたび行われた「文書整理」のために、基本的かつ重要な文書が廃棄処分されてい

る。行政者の一眼的な「整理」のため、今となつては取りかえしのつかない悲劇をもたらしている。はなはだ残念なことである。見方をかえれば、これまで藤沢市役所は行政文書に對し、「整理」の美名のもとに、徹底した虐待を行ってきたのが実態である。

このような悲慘劇に對し、もうこの辺で終止符が打たなければならぬ時期である。

その保存対策の一つとして私共は、文書課の一部機能—文書の編さんと保存・利用—を当館に移管した。第二には、行政と歴史との複眼的な観点からの保存体制をとったことである(行政者Ⅱ文書館職員と歴史研究者の共同作業による保存体制)。さらに第三として特筆すべきは、その年度に完結された文書は次年度には即刻、文書館に移管されることになった点である。

藤沢市文書館の設立により、藤沢市では生産された文書について、歴史史料・行政資料をとわず、体系的に文書館で保存・利用されることになった。

もちろん、現状において、当館が満足な形にあるわけではなく、むしろこれからの課題も多い。

2 理事者側の認識不足

第一に担当職員がいかに立派なビジョンをもって立案しても、管理職員にそれを実現しようとする者がいないことである。事に処して「知識」できる能力はあるが「認識」の段階に到達するまでの時間が、はがゆいほどかかりすぎる点である。

また研究者や市民(所蔵者)から、再三にわたる陳情・説明・説得が、市の管理職や理事者になされても、行政上での位置づけを明瞭に理解し、文書館の充実に専心しようとする者がほとんどいないのが実情である。したがって、当然のことながら行政上、具体的に文書保存を充実させる行動もおこせないでいる。

理事者側の腰の重いのは当市に限ったことではないが、この状態が続くかぎり市民との距離は、ますます拡大することを認識すべきである。いまや文書保存業務の可否は、理事者の責任へと発展しつつあるといつても過言ではあるまい。

われわれは、この点の改善が一日も早くなされることを強く主張するものである。

3 「文化行政」は教育委員会の専

決事項であってはならない

つぎに、他市史のこれまでの市史編さんを見てみると、そのほとんどの史料が編さん終了と同時に図書館に移管され、その結果、ほこりにまみれてしまうのがほとんどである。本来図書館が保存・整理・利用の行なえる機関ではないのに、文化的臭いのするところという意味からか、最終的にそこへほうり込んでいた。

「文化行政」は教育委員会という名のもとに行われた弊害の好例である。確かに教育委員会が、いままで「文化行政」を担当し、その重責を果たしてきたことについての成果は、それなりに評価しなければならない。しかし、たとえば博物館の問題に眼を転じると、博物館という「文化」の実体は埋蔵文化財と美術品の保存・展示がほとんどではなかったろうか。ことに「文化財保護法」という文化財の規程が著しく一点豪華主義ではなかったかという点である。さらに「古代・中世の史料・美術品等を重点的に保護してきたので、それ以後の時代の遺産に手を回させる余裕がなかった」との弁解を一切受け容れるとしても、それは説明にはならないであろう。地方公共団体の文化財保護の実体は、このようになまやさしい状況にはない。一点豪

華主義の悪弊は、むしろその対象にもれる何千何万のかけがえのない、遺産を喪失してしまう点にある。この主義のシミついた考え方からは、江戸時代の地方文書・明治時代戸長役場資料・町村役場資料そして現在の行政文書に至る体系的な保存・整理・研究・公開の発想は生まれてこないと断言できる。

藤沢市史編さん過程で収集した歴史資料と、明治以来の行政文書資料との網羅的・体系的な直結の実現によってこそ、行政側の中に新しい文書館の機関を設置することが可能である。これこそが、今迄あまりにもむごく忘れ去られようとする「文化」の育成と発展の贖罪である。

藤沢市は、この失いかけた遺産に対し、責任をもって常に新しい息を吹きかけ、蘇生をはかりながら将来に伝存しようと考えたわけである。すくなくとも文書館の開館によって以上の悪弊から、わずかながら解放されつつあるといえよう。

4 職員の問題

行政職全体について言えることであるが、職員の専門性ということについて、従来はあまり重視されていなかった。したがって、その観点に

立脚した養成は行われていない。

しかし、今日ほど専門性を要請されている時代はないというのに、現代社会に対応できない職員がゴロゴロしているのが実態ではなからうか。実際には文書館職員がこのようなことでは困るのである。しっかりと社会科学の知識を有し、職員がプロジェクト・チームを編成でき、かつ相互に研磨し合って行ける用意が、ここには要求されねばならない。

こうした前提（専門職制）が保証されて、新しい文書館運動の目的を遂行できると私共は考えている。したがって、そうした職員の養成に対し、自治体は真剣に検討し、その実現方策を提示すべき時期である。

5 書庫の増設

当館の課題の中で、最もさしせまつて重要な事は、書庫の増設である。現在の書庫は、歴史資料の寄託と行政文書第一種（永年保存）だけで飽和状態である。

そこで、文書館敷地内に書庫の増設を進めている。しかしながらこの運動が、思い通りに進展しないのが実状である。

書庫の増設の大きな障害は、市理事者ならびに管理職の無理解にある。

書庫建設に消極的なのはその発想のなかに、できるだけ施設を作らないようにするとの一点ばりであり、むしろ文書館の行政上の位置づけに、前向きな姿勢に立っていないからである。この点はすでに既述したので詳述はさけない。

最後に、文書館運動は、決して恰好のよいものではない。ポーズだけで進められる性質のものでは決していない。むしろドロドロした沼地上での運動である。どうか文書館の設立は実現したが、既述の問題をかかえている点から、本格的な戦いはこれからである、と私共は肝に銘じている。

（参考）

藤沢市文書館には、「藤沢市文書館条例」と、この条例をうけて、さらに「藤沢市文書館運営規則」が作成されている。

建物は、コンクリートブロック二階建て、事務所・閲覧室一七七・四㎡、書庫二四五・三㎡、敷地面積六一三・〇六㎡となっている。

近江湖東農村史料からみた名目金の事例

鏡村庄屋日記より

鶴岡 実枝子

茜さす紫野ゆき しめのゆき

野守は見ずや 君が袖ふる

若年の頃の記憶ばかりが鮮明で、

その後の記憶が断絶してしまうのが老朽現象の徴候であることは、故老の聞き取り調査の経験を持ち出すまでもなく、自分自身を振り返ってみても真実に近いようである。そのせいでもなからうとは思ふのであるが、幼い頃拾い読みした万葉の中で、この額田王の歌は、子供心にかげりのあるロマンが感じられて、妙に印象深く忘れ兼ねていたものである。

その近江大津京の昔、天智天皇の遊獵の標野として知られ、この古歌の舞台ともなったと思われる蒲生野の一角に位置する竜王町鏡を初めて訪れたのは、玉尾家文書の整理に着手して間もない昭和四十四年秋のことであった。

それより以前、昭和三十五年・三十六年の両年にわたって当館に収蔵された旧鏡村玉尾家文書は、もともとと紙屑として故紙回収業者の手から

岐阜の再製紙原料商の許に送られ、製紙工場で溶解の曇目に遭う筈のものであった。

仕切り場の洗札を受けて搬入された故か、保存状態も余りよいとは云えず雑然とした史料群であったが、その中に米相場に関する資料が相当量交っており、通常の村役人家文書とはニュアンスが違っているような感触に興味を覚えた私は、聊かの逡巡をもちながらも目録印行のための整理を志願したのであった。整理に着手してみると、当初に危惧した通り何とも纏まりの悪い史料であつて、屋号は米屋であり、何やら米の取引と共に干鰯商をも営んでいたことは判つても、その仕入・販売に関する米の流れはさっぱり掴めないし、辛うじて玉尾家の所持地の時間的な推移は大凡掴めても、農業経営の実態を示す資料はなく、文化末年に初めて村庄屋となった同家には村の史料も乏しく、同家が村内でどのような位置を占めていたのかも判らない。

また一般に村役人筋の家ならば、大概何代目かの当主が系図や先祖書などを書遺するのが通例であるのに、これも見当らず、世襲名の藤左衛門のほか、藤四郎・藤二・庄五郎等の人名が見出されても統柄が判然せず、困惑度は増すばかりであつた。折しも名古屋と京都の古書店から相前後して玉尾家文書の片われが発見されるに及んで、遅時きながら現地調査の必要性が痛感され、鏡村の調査が実現したのであった。

収穫の終つたばかりの仲秋の湖東平野は、見渡す限り広がった田園のあちこちにピラミット状に盛り上げられた靱ガラの焼却の煙がたなびき古くからの穀倉地帯としての存在が実感として迫る中を、当時鏡区の区長さんを勤められていた伴八三氏のご案内で区会所二階の押入れに保管されている区有文書を拝見させて頂き、欠年分は可成りあるものの、宝暦九年以降の村庄日記その他をマイクロ・フィルムに収録する便宜を与えて下さったことは望外の幸わせた。

玉尾家の就任以前に鏡村庄屋を歴任した森（天明八年退役）・中山の両家は領主市橋氏（所領高一万七千石）の御勝手方の一人として仁正寺

藩の財政にタッチしたから、その日記には村庄屋の域を超えて領主経済の内情を示す記事を多く含んで居り領主米の買受け・村内における年貢先納の取替乃至未進百姓の利付弁納等々、在村米商人の役割を解く材料が豊富で、もたついていた玉尾家文書の理解を可成り前進させることができた。

事改めて喋々するまでもなく、現存する史料は過去にあった事柄のほんの一部を伝えるに過ぎないし、また必らずしもそれが真実を伝えるとは限らない。領主経済と微妙に絡み合いながら致富の道を歩んだ米商人玉尾家の位置づけを、現地に保存された村庄日記によつて或る程度確かめ得たとは思ふものの、同じく該日記中に当時領主の貨幣需要の調達に重要な役割を果たした名目銀の記事を散見するうちに、多分に偶然性をもつて残存した史料を操作して、過去の歴史事実を実証し得ると考えることは傲慢な錯覚であり、単なる推論の上に組み立てられた砂上樓閣に過ぎないのではないかという感を深くせざるを得なかつた。

史料館所蔵史料目録第二十三集に収録した玉尾家文書目録には、玉尾家中心の解題に終始して、同地方の

名目銀について余り触れ得なかつたので、以下に庄屋日記による名目銀の記事の一端を紹介しておこう。

江戸時代の特異な金融制度としての名目金については、従前から諸先輩の論考が多くある。吉川秀造氏によれば、その発生は享保・元文の頃まで遡ることができるとされている。

その論拠は示されていないが、「御触書集成」寺社之部をくってみると、享保七年四月熊野権現大破修復費用について公儀寄附の公示と共に免許した全国勸化を嚆矢として、以後元文―寛保の間に由緒ある諸寺社の全国勸化・富突興行御免の法令が相次いで出されていることと無関係ではなからうと思われる（因みに享保七年は幕府財政が底をつき「御恥辱を不被顧」諸侯に対して上米制を強行した年である）。

中世以来の系譜をもつ祠堂金が當時の名目金の代表的なものであったことは云う迄もないが、江戸期独自の公金名目については、天和三年九月に発せられた江戸町觸に

諸事拝借物仕候町人、自分之為手廻、商人又ハ武士方出家ニかきらす方々借置候其手形ニ拝借金或は上納金之由書入候、自今以後右之通之文書入申間敷候、若以後上

納拝借金之由書入、脇取置候手形有之候ハ、可為越度事

とみえ、法的裏付けは得られていないものの、主権の所在地江戸において、その先駆的形態を認めることができる。

江戸期の名目金が公権力による債権の保護をメリットとして行われたことは知られる通りであつて、元禄一五年閏八月の相对済令と同時に発令されたその除外例の中にみえる公儀引負金銀・拝借金・為替金銀と天和三年の江戸町觸と如何に拘わるかは判らないが、名目金の盛行は勿論もつと後年に属し、地域的偏差も存したと思われるが、畿内においては宝暦頃から本格化したと見られ、同八年五月公儀から寺社奉行へ対し京都泉涌寺祠堂金免許觸流の出願について、類似の出願の増加を慮り、差加金を認めず貸付額を限定した上で免許すべきよう指示している。

鏡村の場合、現存の最古の庄屋日記は宝暦九年であつて、それ以前については確かめ得ないが、同年五月村要用金として篠原・鏡・上田の三カ村組合で大津御用米会所へ宛てた公儀御米代銀十貫目の拝借証文を初見とする。このような郷借証文が領主借金の肩代わりであつたであろう

ことは、同年九月鏡村を含む仁正寺領四カ村の債務の滞りを訴えた八幡町麻屋長左衛門（名目不明）は、仁正寺藩の役人から年賦米の約束をとりつけていることによつて推測される。以後鏡村の庄屋日記には、仁正寺藩御勝手方の指図に従つて京都・大津等へ赴き証文の更改を行つており、各証文の写はないが借受名儀人の名前が記録されている。名目金とは云うものの一般の大名貸と同様返済は川滑ではなく、寧ろ延滞が普通であつたとみえ、明和元年正月青蓮院名目銀の返納を延滞すべからずとの觸書が江戸・京・大阪・大和・近江の地域に出されている。このような状況に対応したものか、明和二年二月鏡村が長香寺祠堂金の新規借入に際して作成された証文は次の通りのものである。

預り申御祠堂金之事
合金五拾両

右は従関東長香寺え被為遊御寄附候御祠堂料其元御支配被成内、書面之金高村方就要用儲ニ預り申候処実正也、来ル極月廿日限無相違返納可仕候、尤庄屋年寄組頭惣代印形仕候上は村方預り金ニ無紛候然ル上は日限之節金子不調候歟如何様之異変出来候共、村中軒役を

以取集、御金高都合無相違急度返済可仕候、為後日之御祠堂金預り証文仍如件

明和二年二月 庄屋半 平
長香寺御祠堂料 年寄善右衛門
支配人 同 三郎兵衛
沢松屋平右衛門殿（以下組頭二名

村惣代五名略）

さらに本証文の添手形として

一其元御支配被成候長香寺御祠堂金之内別紙本証文之通金高儲ニ預り申処実正也、尤從御公儀様御太切ニ被為仰渡候御金ニ候得は、御地頭入用金又は内証ニ而外々々貸附申金子ニ而も曾而無之候、村方要用ニ付私共借各名前ニ相違無之候勿論是迄御大切成御名目御金高借受毛頭無御座候、此上銘々所持之家屋敷田畑等質入堅仕間敷候、若判形之内如何様之差障出来仕候共、相残ル印形のもの引請、村中軒役を以御金高都合急度返納可仕候、為後日御祠堂金引当添手形仍如件（宛書・差出書本証と同じ）
果して証文で強調している通り純粹な村借金であつたか否かは断定の限りではないが、債権の保護があるとは云え大名・旗本相手では実力行使をし難い現実が、このような様式の証文となつて表われていると見做

されるのである。

なお、上掲史料のように名目金証文には利子率の明記されない場合が多いのが特色であるが、該証文を写し込んだ庄屋日記には

一金五拾兩 利足年十五六

此利七兩三步 十二ヶ月分

銀三匁

残四拾貳兩銀拾貳匁

二月廿三日右判元見上壱人下壱人

日野町白銀町福地庄九郎口入

銀主京高倉四条通上ル丁

橋本(沢治屋) 平右衛門

との注記があり、年利一割五分六厘の利足分が先に棒引されて授受が行われたことを示している(二月の起債で年末返済に十二ヶ月分の利息は月躍りを意味するか)そして京都の銀主のほかに日野町福地庄九郎なる口入人が介在しており、口入料がどのような形で支払われているかは明らかではないが、借入側にとって可成り厳しい条件の貸借関係であったことが知られる。

同年二月諸種名目金の負債の累積で難渋を訴え無利足永年賦を京町奉行所へ歎願した願書に添付された領内十八カ村の名目金未済分の明細を表示すれば表1の通りである。

総額銀四七貫七四二匁・金一八九一兩三步の内訳は青蓮院門跡を筆頭に十種、金主は表2に示すように古

表 1

名目主	銀 額	金 額	口数	金主
青蓮院	16,013.00	向 步	件 9	人 6
円満院	2,200.00	83-1	13 1	3 1
花山院		867-0	0 0	2 2
心華院	3,000.00	60-0	1 2	6 3
京極宮	10,100.00	40-0	0 0	2 3
伏見様	2,916.00	11-3	2 6	4 3
菊亭様	2,916.00	81-2	4 4	3 1
菊亭様	5,308.00	189-1	5 5	1 4
千種様	4,705.00	189-0	5 5	1 1
京井ノ口		20-0	0 1	6 1
糸割符	3,500.00	351-1	6 6	1 1
計	47,742.00	1,891-3	52	110

註 金主の人数は一人が幾種類かの金主を兼ねているため、実数を示してある。

表 2

名目金主名	取 扱 名 目
近江八幡町	蚊帳屋佐丘衛 青蓮院・糸割符
"	たばこ屋甚兵衛 伏見宮
"	油屋利兵衛 青蓮院・花山院・心華院・京極宮
"	" 伏見宮・千種様・円満院
"	藤屋弥右衛門 菊亭様
"	舟橋清六 円満院・京極宮・千種様
"	畑屋源右衛門 心華院・千種様・京極宮
"	かせ屋三郎兵衛 青蓮院
"	塩屋作左衛門 円満院
"	蚊帳屋太右衛門 青蓮院
古保志塚	六右衛門 伏見様・千種様

保志塚六右衛門を除けば全員が近江八幡町の商人であり(同年三月の同種資料では八幡町商人十一名、京都町人四名、ほか一名となっている)一人で数種の名目を扱っていたことが判る。

表示された未済名目金の大半は寺社・堂上のものであり、御役所金持

借の形の名目金は少なく、両者の間に公権力の介入に差異があったか否かは判らないが、明和四年六月京都井口会所で扱っている大阪御金蔵為替名目の滞りに関して仁正寺領十四カ村の村役人が京町奉行所へ召喚され、手錠・宿預の処罰を受けている。拝借名儀人が複数村の庄屋であったことから、これも実質は領主の負債と見られるが、鏡村では庄屋半平・年寄平助・同善右衛門・百姓代三郎兵衛四名宛の出頭命令に対し「右御召ニ付廿八日藤左衛門(玉尾氏)と清助式人罷登、年寄平助は病死、三人名前二而壱人ハ京都ニて雇、庄屋半平病氣代安兵衛雇也、年寄善右衛門ハ正人ニて藤左衛門勤、三郎兵衛代清助罷上り候処、七月朔日御前ニて井口ハ借用金段々不埒ニ付依之借り主手錠其外年寄百姓代ハ宿預ニ被仰付候、借り主庄屋代ハやとい安兵衛ニて俄清助と仕替、清助手錠請安兵衛と変名いたし手錠請申候」としている(年寄平助の死も擬装)。多分に馴れ合い染みた弁法の措置がこの種の訴訟の常套手段であったかは判らないが、同年末迄に庄屋代理人の手錠請は然るべき口実を設けて二名交替しているが、その間在宿一日米壱升・京上下一日銀三匁の日割計算で蔵から手当が支給されている。年々累積する領主負債のうち、こ

のような名目金がどの程度の比重を占めていたかは確めることはできないが、領主家計建直しのための省略年限中は他の借入金と同様利払いを凍結し、領内村々に対して金主と直相對を命じている例は文化五年の庄屋日記に見出される。名目金の金主層にとって、大口貸付需要源となった領主層への直貸を避け、その領内の村落共同体の頂点にある村役人層を対象として個別に分散させた形の郷印証文を徴することによって危険分散を図った意図も、この間の事情を熟知した仕法であったと見られる。天明三年領主市橋氏の江戸における勅使馳走役拜命のため、臨時入用金二千兩の才覚を命じられた在所の御勝手方四名は、とり敢えず日野町中井源左衛門から同人等名儀の書入証文を以って千五百兩を借入れているが、その際金主中井氏から「領分中証文ニも不及金子可出」との申出にも拘わらず、御勝手方としては「此度式千兩之才覚出来申候ニ付御領分中より堅き証文取置申度」と確実な保証を求め、領内八組の組合村からそれぞれ額面二五〇兩の宿場御貸附金拝借の質地証文(宛書は天津御役所)を徴しており、同地に濫発された名目金証文には、この種の非合法ものが相当含まれている可能性を暗示するものである。

受贈図書

昭和四八年度 (一)

神戸市史 第三集年表索引編
高槻市史
神奈川県民俗調査報告 六(神奈川県立博物館)

八丈島民俗資料調査概報(民具)(東京都教育委員会)
池田市史
三条家文書目録 書類の部(国立国会図書館)

秋田藩町触集(下)(今村義孝・高橋秀夫)
牧岡市史 第三卷史料編一・第四卷史料編二

土浦市史編集資料 第二〇・二二篇
明治大学刑事博物館目録 第四〇号
鹿児島県史料 旧記雑録追録三・四(鹿児島県維新史料編さん所)

大矢重治一代記(大矢圭一)
商業教育八十年記念誌
野間教育研究所二十年の歩み
大宰府史跡 昭和十七年度発掘調査略報(九州歴史資料館)

府中市自然調査報告 第二次調査(府中市立郷土館)
岩見沢市史 資料第三集
岩見沢繁昌記(岩見沢町)
無形の民俗資料記録 第一八集(文化財保護委員会)

青森県立郷土館(要覧)
学制一〇〇年記念展出品目録(小樽市博物館)
神奈川県史料編中世一
府県政白書(全国知事会)
兵庫県海外発展史
作品論文集(新潟大学蓮光会)
科学技術制度史
新指定重要文化財図説 昭和四一年度
[文化財保護委員会]
コミンフォルム重要文獻集(日刊労働通信社)

民俗(神奈川県立博物館)
博士學位論文 第二集(京都大学)
福島市史資料叢書 第二六・二七輯
江戸川区郷土資料集 第六集(江戸川区郷土資料室)
(町田市)小島資料館(要覧)
岡山大学蔵書目録(岡山大学附属図書館)
看板とちらし 資料案内シリーズNo.一二二(天理参考館)
郷土資料目録(新居浜市立図書館)
天理参考館四十年史
金沢大学図書目録 昭和四五・四六年度
(金沢大学附属図書館)
松本図書館増加図書目録 昭和四七年
長野県政史 第三卷・索引
東京書籍館における旧藩蔵書の収集(国立国会図書館)
武蔵野市史 史料目録編一
御殿場市史史料叢書 一

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

神奈川県史料所在目録 第三五・三八集(神奈川県史編集室)
(栃木県)小川町誌
朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇III(末松保和編)
堺市史 続編第四卷
愛知県昭和史 下巻
東京百年史 第一・五・六卷
北海道所蔵公文書件名目録 二(北海道総務部文書課)
図録日本の貨幣 二・四・七・一〇(日本銀行調査部)
文化財の保護(東京都教育委員会)
北海道開拓記念館調査報告 二・四
北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第五・六集
市立旭川郷土博物館所蔵品目録
学術文獻収報 一三七・一四八号(北海道教育大学)
山形県立博物館研究報告 第一号(東京都)稲城町誌
都留文化財資料 No.一・二(都留市教育委員会)
古文書近世史料目録(山形大学附属郷土博物館)
郷土研究資料(都留市文化財審議会)
和歌山県古文書目録II(和歌山県教育委員会)
大宮市文化財調査報告 四・五(大宮市教育委員会)
鎌倉国宝館論集 第十六集
伊丹市史 第七卷
秋田県歴史資料目録 九(秋田県歴史資料収集協議会)
府中市近代代編資料集 第一・二集
流山市史料集 第四集(流山市教育委員会)
渡辺文庫目録(長崎県立長崎図書館)
蔵書目録 第三卷(宮崎県立図書館)
購入雑誌目録(東京学芸大学附属図書館)
黒風白雨九十年(金沢春友)
輪島市史 資料編第二
山形市史編集資料 第三・三三三号

北九州大学開学二十五周年記念論文集

神奈川県資料所在目録 第二・八・三四

集(神奈川県史編集室)

酒田市史 史料編六

東京国立博物館百年史 資料編共

経塚遺宝展目録(奈良国立博物館)

愛知県教育史 第一卷(愛知県教育委員

会)

大館市編さん調査資料 第二・五・一一

集

戦国文書聚影(戦国文書研究会)

流山市金石文記録集 中巻(流山市教育

委員会)

所蔵資料目録 第一集(古河市郷土資料

館)

浦和市文化財調査報告書 第一七集(浦

和市教育委員会)

近世内部資料 三五・三六(茨城県史編

さん近世史部会)

資料解説シリーズ No.1-11(北海道開

拓記念館)

平野屋家・小坂合村文書目録(大阪市立

中央図書館)

高木家文書調査報告 II(名古屋大学附

属図書館)

藤沢市史 第二巻資料編

兵庫県同和教育関係史料集 第二集・同

史料追加目録(兵庫県立教育研修所)

越谷市史 三史料一

福島市史 三巻近世二・一一巻近代資料

II

尼崎市史 四巻史料編一

文化財シリーズ 五・六(杉並区教育委

員会)

郷土文献目録 三(秋田県立秋田図書館)

史料叢書五 長府名勝旧宅址記(下関文

書館)

郷土資料目録(8)(同右)

知立市誌資料 四

岐阜県史 通史編現代・史料編近世九・

史料編古代中世四

室蘭港湾資料 第九集室蘭屯田兵(市立

室蘭図書館)

福島県教育史 第二巻(福島県教育セン

ター)

埼玉県史料集 第六集諸国寺社朱印集成

(埼玉県立浦和図書館)

船橋市の文化財(船橋市教育委員会)

出雲図書館郷土資料目録

土倉家文書目録(天理図書館)

岐阜市立図書館和本目録

川上文庫目録(浜松市立図書館)

高林家文庫目録(同右)

熊本県立図書館郷土資料目録

小浜市立図書館昭和四五・四六年度増加

図書目録

福島県教育史編纂資料 六・九・一一集

(福島県教育委員会)

目でみる町史(福島県磐梯町史編纂委員

会)

愛媛県内公共図書館所蔵郷土資料総合目

録(愛媛県立図書館・同図書館協会)

富山市の文化財シリーズ II富山市の年

中行事(富山市教育委員会)

富山の「年中行事」・「人の一生」(民

俗のグループ)

宇治・宇戸の民俗(岡山県文化財保護協

会)

富山のあゆみ(富山県)

番付集成 下(林英夫・芳賀登)

彦根市立図書館郷土資料目録 第一・四

集(彦根市立図書館)

玉里文庫目録(鹿児島大学附属図書館)

郷土関係資料目録 第二・三集(明石工

業高等専門学校)

神奈川県史料編 二古代中世(2)・六近

世(3)幕領一・一五近現代5

静岡県教育史 通史編下(静岡県立教育

研究所編)

狭山市文化財調査報告 I宮地遺跡(狭

山市教育委員会)

概報下堤遺跡 第五次(秋田市教育委員

会)

秋田城跡(同右)

西会津歴史物語

(山形県)高島町史 上巻

武蔵野市史 続資料編一

図書叢刊 九条家文書三・詞林金玉集

上巻(宮内庁書陵部)

関西大学東西学術研究所資料集刊 八

江戸町人の研究 第二巻(西山松之助)

鳥取県立科学博物館所蔵目録 一・二・

七・九

郷土資料目録 一・二(鳥取県立鳥取図

書館)

福井県立図書館蔵書目録 工学・芸術・

文学II

郷土資料目録(春日井市立図書館)

島根県公共図書館郷土資料総合目録追録

(島根県立図書館)

徳島県史料所在目録 第三・四集(徳島

県立図書館)

郷土資料増加目録(鹿児島県立図書館)

佐野市史料所在目録

中村家・高倉家文書目録(飯能市教育委

員会)

柏崎地方における中世の山城(新潟県立

柿崎高校歴史クラブ)

北九州市年表I

千葉県議会史 第一・二巻

秋田県林業史 上巻

河内国茨田郡岡新町村中島家所蔵近世文

書目録・同史料集 第壹集(中島三佳)

開発に伴う文化財の保護とその措置(横

浜市教育委員会)

郷土史に輝く人びと(佐賀県青少年育成

県民会議)

御殿場市史資料所在目録 (一)(三)

歴史資料館収蔵資料目録 二集(福島県

文化センター)

神戸開港・居留地神戸村資料目録〔神戸市立図書館〕

市立図書館

宇佐市史編纂基本史料目録 第四集〔別府大学文学部〕

〔広島県〕 神辺町史 上巻

郷土資料目録〔市立釧路図書館〕

港北ニュータウン地域内文化財調査報告

Ⅲ・民家〔横浜市埋蔵文化財調査委員会〕

会

郷土資料総合目録〔広島県立図書館〕

愛知県立芸術大学附属図書館蔵書目録

第五輯

蔵本陣跡〔菊地重郎・岡田真雄〕

わらびの歴史〔蔵郷土史研究会〕

蔵市の文化財〔蔵市教育委員会〕

日本外交文書 大正九年第二冊上・下巻

第三冊上巻

日本外交文書 村米移民問題経過概要附

属書

舞鶴建築組合史〔瀬戸美秋〕

内閣文庫洋書分類目録 英書篇下

上総国望陀郡中島村史料集〔武内千代松〕

収集資料月報 一〇一〇〔八欠〕〔京都府立総合資料館〕

增加図書目録 昭和四十六年度〔愛知教育

大学附属図書館〕

富山県史 民俗編

川西市史編纂資料目録集 五・一〇

武蔵国多摩郡秋川流域近世古文書目録

〔立正大学古文書学研究室〕

神宮文庫漢籍善本解題

神奈川大学図書館蔵書目録 和書・洋書

〔昭和四五・四六〕

尼崎市史編纂資料目録 二・四

徳島藩幕末・維新史の研究〔松本博〕

出羽庄内の民具〔致道博物館〕

古河市史資料編 別巻

常陽の村落史料目録 前野村森田家文書

・統諸家文書〔立正大学古文書学研究

室〕

島田市史 下巻

日光叢書 社家御番所日記一三〔日光東

照宮社務所〕

上代錦綾特異技法攷 〔川島織物研究

所〕

内閣文庫収書目録 三五号

町田市史史料集 八・九集

国立教育研究所附属図書館蔵書目録

阿弥陀仏彫像展〔奈良国立博物館〕

第八回特別展 屯田兵〔北海道開拓記念

館〕

新庄・自然と文化遺産〔新庄市教育委員

会〕

徳光用水〔細野丈助〕

足羽町の古文書〔同右〕

山口県史料 古代編〔山口県文書館〕

寺内萬治郎展〔埼玉県立博物館〕

明治初年の自治体警察番人制度〔東京都

公文書館〕

興産相互銀行改め北日本相互銀行 二十年

史〔北日本相互銀行〕

東京市史稿 産業編第十七・市街編第六

四〔東京都公文書館〕

宝塚市史編纂資料目録集 三・四

木更津市史

津軽三十三霊場〔山上貢〕

奥殿の研究〔大町まちゑ〕

岡山大学所蔵近世庶民史料目録〔岡山大

学附属図書館〕

長野県教育史 第八巻史料編二

逐次刊行物目録〔北星学園大学図書館〕

近世農村の歴史人口学的研究〔速水融〕

大阪府教育百年史〔大阪府教育委員会〕

品川の歴史シリーズ No.9地名編〔品川

区教育委員会〕

神社の考古学〔大熊規矩男〕

京都府の古瓦〔丹後郷土資料館〕

三重県文化財調査報告書 第一五集〔三

重県教育委員会〕

川越の石仏〔川越市史編纂室〕

郷土誌シリーズ 一・八〔上田市立博物

館〕

東京市十五区区分図〔三〕〔東京都公文書館〕

郷土古文書記録 第一号〔浜松市立図書

館〕

史料編纂所図書目録 刊本五

大日本維新史料 井伊家史料八〔東京大

学史料編纂所〕

保古飛呂比 四〔同右〕

大日本近世史料 諸問屋再興調十二・幕

府書物方日記九・編修地誌備用典籍解

題〔同右〕

大日本古記録 小右記七・言経卿記八

〔同右〕

大日本史料 第五編之二十四・第七編之

二十一・第十二編之四十八〔同右〕

大阪研究文獻目録〔大阪市史紀要別冊一

三〕〔大阪市立中央図書館市史編集

室〕

漢籍分類目録 四部之部〔神戸市外国語

大学図書館〕

老松園文庫目録〔浜松市立図書館〕

鎌倉国宝館図録 一九集鎌倉彫

富山大学ヘルン文庫所蔵ヘルン関係文獻

解説付目録〔富山大学付属図書館〕

Catalogue of the Lefcadia Hearn

library in the Toyama High School

常設展示資料目録・同解説書〔北海道開

拓記念館〕

京都国立博物館要覧

国立西洋美術館要覧

茨木市教育百年史〔茨木市教育委員会〕

越前大野一揆〔坂田玉子〕

奥越史料 第三号〔大野市文化財保護委

員会〕

信濃の縄文文化展〔日本民俗資料館〕

岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地

内埋蔵文化財発掘調査概報〔山陽町教

育委員会〕

埋蔵文化財発掘調査概報 一九七一・一

九七三〔京都府教育庁文化財保護課〕
北海道刊行政資料目録 第七号〔北海道行政資料課〕

〔福井県〕三國町史料 町内記録
山形市史 上巻・史料編Ⅰ

長野県史 近世史料編 第五巻(一)
官公庁出版物目録 昭和四十六年度版〔国立国会図書館収書部〕

三多摩関係史料集 一 深沢家文書目録
〔東京経済大学図書館〕

蔵書目録 第三巻〔県立長野図書館〕
青森県の民具〔青森県立郷土館〕

第一銀行小史—九十八年の歩み〔第一勧業銀行〕

栃木県史料所在目録 芳賀郡3芳賀町
高知県史 考古資料編

能代市史資料 第四号
川西町史料目録 第一集〔新潟県川西町教育委員会〕

立教大学所蔵文書目録 Ⅰ〔立教大学日本史研究室〕

書翰自叙伝吉田蔵〔吉田蔵〕
川越館跡遺跡 第三次発掘調査概報〔川越市教育委員会〕

函館志海苔古銭〔市立函館博物館〕
第九回特別展目録 にしん漁労〔北海道開拓記念館〕

仙台市博物館図録 Ⅱ
観覧者実態調査 昭和四六・四七年度〔東京国立博物館〕

沖繩県史 第三・二巻〔琉球政府〕

中野区史 昭和編三 昭和資料編一・三
新北海道史 第四巻通説三

日蓮宗寺院史料目録 妙覚寺文書〔立正大蔵院史料研究会〕

成田市史 近世編史料集四上〔村政一〕
前橋市史 第二巻

日向古美術展〔宮崎県総合博物館〕
南部小絵馬〔盛田荘〕

愛知学院大学附属図書館〔寄託〕正眼寺
文書目録

奥田家文書第七・九巻〔大阪府立図書館〕
地方史研究要覧〔地方史研究協議会〕

続／＼青海—新生への歩み—〔青木重孝〕
新庄藩戊辰戦史〔常葉金太郎〕

〔香川県〕琴平町史 第一集琴平町史稿
中村市史

品川の歴史シリーズ 第三編近世の品川
〔民俗・概説・社寺・地誌文化・美術〕

〔品川区教育委員会〕
宇和島郷土叢書 第十一巻〔宇和島市立図書館〕

別府大学文学部史料所蔵文書編年目録
第五集〔日本史研究会他〕

富田林市史 第五巻
台湾の民具展示目録〔埼玉県立博物館〕

東京国立博物館百年史索引〔本編〕
横浜市史 資料編十一

浦和市近世文書目録 二〔浦和市教育委
員会〕

員会〕

羽咋市史 原始・古代編
青森県近代史年表〔宮崎道生・青森県企画部県民課〕

北条五代文書展〔神奈川県立文化資料館〕
津田山訴訟記〔枚方市史編纂委員会〕

蜷川の郷土史〔蜷川校下史編纂委員会〕
〔青森県〕佐井村誌 上・下巻

西尾市史 自然環境原始古代一
北上市史 第四巻近世(2)

泉屋叢考 第壹輯・第拾五輯〔住友修史室〕
白河市史索引〔上・中・下巻〕〔白河市立図書館〕

原野農芸博物館図録 第八集〔平松儀勝〕
静岡県教育史 資料編上・下巻〔静岡県立教育研究所〕

飛騨国乗鞍岳雪鳥記〔熊原政男〕
市制施行五十周年記念歴史写真集〔函館市史編さん事務局〕

京都国立博物館蔵品図録 四七年度版
資料目録 四〔北海道行政資料室〕

本庄市史料 第八巻
国文学研究資料館逐次刊行物目録〔研究情報部〕

総合増加図書目録 第九集〔名古屋市鶴舞中央図書館〕

桐生市長沢家文書目録〔桐生市立図書館〕
広瀬家文書復目録〔一)家宝〔杉本勲他〕

岡山大学附属図書館概況

蔵のたばこ屋昔と今〔井野田最等〕
土佐壇について〔蜷川親正〕

出羽路・新庄〔新庄市〕
佐賀県立図書館所蔵郷土資料目録〔現代編〕

福岡県文化会館〔所蔵〕福岡県近世文書
目録 第三集

続つがるの夜明 下巻之巻〔山上奎介〕
Proceedings of the conference on co-operation among the museums in the Asian and Pacific region

〔Cultural and Social center for the Asian and Pacific region〕
旧幕領豊後国日田郡豆田町広瀬家古文書撮影フィルム目録〔杉本勲等〕

咸宜園蔵書目録〔同右〕
熱海絵図かれんだあ〔熱海市立図書館〕

浅草細見〔浅草観光連盟〕
東大阪市史資料 第五集

岡山県埋蔵文化財報告 三〔岡山県教育委員会〕
近世近江農村史の研究〔河井勇之助〕

伊場遺跡第五次発掘調査概報〔浜松市教育委員会〕
伊場遺跡出土文字集成〔概報〕 二〔同右〕

愛媛県立図書館増加図書目録 No.二―三
南紀文書(一)〔中村保良〕

江戸川の農具展目録〔江戸川区郷土資料室〕
〔以下次号〕

旗本家文書の所在調査について

第一 史料室

(1)はじめに

第一史料室においては、昭和四四年度以来、全国の大名家文書の所在調査を行い、この経過は逐次本誌に公表して来た。この間、史料所蔵者各位はもとより、関係機関・各位がこの調査の目的・趣旨に理解を示され、情報・資料提供を含む全面的なご協力とご支援をいただいた。これらの方々に、改めて厚く御礼申し上げますとともに、なほ今後とも引き続きご協力をお願い申し上げます。本来、この種の調査は、関係機関等の相互協力による全国的・組織的な一斉実施が望ましいものであるが、第一史料室ではその時期の到来を期待しつつ、可能なかぎり計画的に、内容の充実した所在調査を随時実施して来たものである。

今回、右の大名家文書と併行して旗本家文書の所在調査を実施しようとする趣旨も、全く右の事情の延長線上にあるもので、周知のように、大名家に対して旗本家の場合、何よりも調査対象が比較を絶する量の

広がりがあり、その所在（前提としての子孫の方々の所在）を確認する手だても困難を極めている。しかし同種の一斉調査が現時点でなされていない以上、可及的充実を期した基礎的作業を行いこの成果を随時公表することを通じて、この調査の趣旨をいっそう徹底していくことをはかっている。

繰り返すようであるが、旗本家文書は、調査対象量自体が膨大であるばかりでなく、支配関係の拡張・錯綜が顕著であるため、取り敢えず今次調査においては旗本家所蔵文書のみに限定し、陣屋関係史料は対象からはずすことにした。ついては、旗本子孫の方の御住所・史料所蔵状況および調査関係の資料等の情報があれば、ぜひ当室にご一報賜わりたく、誌上を利用して関係各位に広くお願いを申上げる次第である。

(2)調査の目的（範囲）

国内にある旧旗本家所蔵文書の概況を明らかにしその結果を公表するとともに、文書の保存と利用に関し

て適宜適切な措置を講ずることによって、史学の研究等に資することを目的として実施する。

(3)国内におけるこれまでの旗本家文書の調査とその問題点（一略）

(4)調査の方法

(A)基本カード作成 対象を、当面五百石以上の旗本に限定し、まず、元治元年（江戸横山町出雲寺蔵版）「昇栄武鑑」により三千石以上「三六家」と、文政十二年版「国字分名集」により「昇栄武鑑」所蔵家を除く二三四五家について、知行高・支配地等必要事項を記載した合計一五八一枚の基礎カードを作成した。基礎カード作成に当っては、諸武鑑類、既刊・未刊史料類を参考とし補訂を行なった。そのさい、既に関係機関や当館等で調査が終了しているものは、その旨明記して除外した。

(B)菩提寺調査 「寛政重修諸家譜」により一家ごとに菩提寺を調べてカードに記載し、大正五年版「寺院総覧」および昭和四五年版「全国寺院名鑑」（全四冊）によってこれら菩提寺の現住所を調べ、公文書を発送して子孫の方の現住所を、通信・電話等によって教えていただいた。この作業は、五千石以上について、一応完了した。

(C)旗本家への照会と調査 菩提寺よりのご教示に基いて、旗本家子孫の方に公文書によって所蔵現況・関連事項等について照会し、そのご回答により訪問して現地で整理を行い仮目録を作成する。個々の史料（群）には、一連番号と「史料館」印を押した短冊を挿入し、あるいは封筒等に格納して、仮目録の写し一部を所蔵者の許に残して、保管・検索に便ならしめる。基本カード・仮目録は当室・館に備えつけて一般の利用に供するとともに、逐次調査の概況を公表して行く。

(5)今次調査の概況

今次調査は、五千石以上の旗本のうち子孫の方の判明した分について行い、このうちご回答のあった方の中から約十家について直接うかがって調査を終了した。これらの経過および所蔵史料の概要は、本誌次号以後から順次報告していく所存である。面倒な依頼に対して一々懇切なご回答とご教示を賜わった菩提寺各位と、目録作成に格別のご理解とご協力をいただいた所蔵者各位に、誌上を借りて改めて深甚の謝意を表する。なお、調査は五千石以下の旗本家についても、情報あり次第随時行なっており、その成果をまとめていく。

昭和四九年度
新収史料紹介(一)

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す

受贈

陸奥国 津軽家文書（追加分）

同家文書は昭和二年度から三次にわたり同家から約五千点の史料の譲渡をうけ、すでに整理を終えて、当館所蔵史料目録第十二集として印刷刊行済みであるが、今回あらたに発見された二点の史料を追加として御寄贈いただいたものである。同家の御厚志に対し深甚の謝意を表する次第である。

二点の史料のうちの一つは、『津
輕旧記類 第廿亨号』で、同書は全
二六冊のうちこの号だけが欠本にな
っていたもので、これで完全に揃っ
たことになる。僅か一冊ではあるが
これが補充されたことの意義は改め
ていうまでもなく、極めて価値ある
一冊であつた。

他の一冊は「蝦夷地并松前為御見
分公儀御役人被相越候一件并度々御
達書トモ」と表紙書きのある史料で
嘉永七年から安政七年に至る記事か
ら成立している。津軽家文書中には
蝦夷地警衛に関する多数の史料が含
まれているが、この年代のものは従
来の分にはなかつたので、これまた
追加として受入れた意義は大きい。

(原藏者)東京都新宿区中落合
一〇一一 津軽義孝氏)

⑦京都市 蜷川家文書（追加）

本文書は、昨四八年度収集文書（本誌前号六ページ参照）の追加分に当るもので、現在東京都新宿区在住の蜷川親継氏保存のものについてマイクロフィルム収集を行ったものである。このことについて、格別のご配慮とご協力を賜った蜷川親継氏同親正氏の御二方に、改めて深い謝意を表したい。

前回は、京都市内の同家文庫蔵保管にかゝる蜷川式胤関係史料のほか同家の家史に関わる近世初・中期の史料と東寺公人としての中期ごろの年預方関係史料を対象としたが、今次は近世中・末期の公人関係記録類を収集した。この中で注目すべきは「五反田書院記」（前回の分と合わせて天保二年～明治五年、全三三冊で、これは公人としての仏事をはじめ寺院経営・所領支配に関する記事のみならず、祭礼・地震・風水害のさいの町方の動静や諸物価（とくに米価）の動きが克明に綴られており、とくに幕末開港前後からの畿内周辺部の世情や人心の動向、大塩の乱な

どの一揆やうちこわしなどが手にとるように記録されているなど、京都町方や畿内周辺の庶民の生活史料としてもきわめて興味ふかい内容のものである。寺院史研究とともに、今後、利用が大いに期待されて良からう。（原蔵者〳〵京都市南区八条大通宮西入 蛭川親継氏。総点数六〇冊六リール〳〳三、二四二コマ）

国立史料館定期刊行物の配布先について（お知らせ）

表記の件については、現在次のように行なっていますのでお知らせします。ご照会・ご利用等の際ご参考にして下さい。（史料館関係者等は除く）。個人へは、頒布していませんので念のために申し添えます。

	史料保存機関	図書館	都道府県議会	報道関係	歴史学会	委員	都道府県教育会	町村立図書館	その他	公共図書館	都道府県市立	国立関係機関	・付置研究所	大学史学研究所	大学付属図書館
史料館報	○			○	○		○	○		○		○	○	○	○
史料館研究紀要	○			○	○					○		○		○	○
史料館所蔵史料目録	○				○			○						○	○

彙

報

○昭和四九年度事業（その一）

一、史料の収集

「津輕家文書」の寄贈をうけたほか「京都市 蜷川家文書」の収集（いずれも別項参照）につづき、「幕府右筆蜷川家文書」、「常陸国志筑本堂家文書」、「京都柏原家文書」、「信濃国佐久郡相馬家文書」など約一〇件のマイクロフィルムによる収集および数件の文書の受託を予定している。

二、史料の所在調査

愛知教育大学吉永昭氏の協力を得て、愛知県新城市所在の「滝川家文書」（旧旗本設楽氏代官）を中心に周辺の三河国旗本知行所関係文書 および京都府立丹後郷土資料館の協力により、丹後地方の主として縮細間屋関係文書について、それぞれ、今年末から明年初にかけて所在調査を行うことになった。また四七年以降着手している、全国関係諸機関作成にかかる既調査の近世史料目録は、本年度も引き続き計画的に収集を行う予定であるとともに、新たに、既刊の「庶民史料所在目録」（学振刊。稿本は当館で保管中の基礎カード化を完了した。これらの成果は、一定段階の作業完了とともに順次公表して行くはずである。関係各位の一層のご協力をお願い申上げたい。

三、第二十回近世史料取扱講習会の実施
本年度の標記講習会は、九、十両月に
わたり、仙台・東京両会場において開催
された(別稿参照)。実施に当り、会場
提供はじめ運営万般にわたってご協力い
ただいた宮城県図書館はじめ国立教育会
館・仙台市立博物館・東北大学図書館
および都道府県・大学等の関係機関各位
に改めて深甚の謝意を表する。

四、定期刊行物の発行

『史料館所蔵史料目録』第二十四集と
して、「信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文
書」(名主)を収録するほか、『史料館
研究紀要』第八号および『史料館報』第
二十一、二十二号を発行の予定。なお、
本年度は「史料館要覧」の改訂版も発行
する予定である。

○評議員会

本年度評議員会総会は、七月一五日、
如水会館で開催され、管理運営の概況、
事業計画と進行状況、五〇年度概算要求、
庁舎の建築その他について評議が行われ
た。また、史料部会は八月三〇日、当館
会議室で開催され、史料館の管理運営、
本年度事業計画と明年度概算要求につ
いて評議がなされたほか、史料館の事業
(将来)計画等について活潑な評議がなさ
れた。この席では、国文学研究資料館の
開館・閲覧業務開始にあたっては、とく

に、①史料館の史料閲覧・利用者の不便
を来すことはいっさい避けること、②史
料の管理およびサービス(レファレンス
も含む)面で混乱を来たさないこと、③双
方の独自性をいっそう発揮できるように
することの三点を前提にして協力・提携
関係を保つべきことが大原則として確認
された。

なお、国文学研究資料館の開館に備え
て評議員は全員再任された。史料部会関
係は次の各氏である(敬称略・五十音順。
任期)昭和四九・七・一―五一・六三〇)
石井良助(専修大学教授)、白田甚五
郎(国学院大学教授)、大久保利謙、木
村礎(明治大学教授)、児玉幸多(学習
院大学長)、小葉田淳(京都女子大学教
授)、杉本勲(武蔵工業大学教授)、鈴
木忠直(大正大学教授)、豊田武(法政
大学教授)、中村幸彦(関西大学教授)、
古島敏雄(専修大学教授)、宝月圭吾(東
洋大学教授)

○本年度第一次所在調査結果

本年度の第一次所在調査は旗本設楽氏
の三州代官滝川家文書(新城市出沢)を
対象として、愛知教育大学教授吉永昭氏
のご協力を得て、十月十一―十四日、当
館から藤村・鶴岡の両名も参加して調査
を実施した。調査の詳細はいずれ報告す
るが、滝川一美氏をはじめ関係各位のご
協力に心から謝意を表する。

〓お知らせ〓

新改築に伴う 史料の閲覧利用について

一昨年の改組以来、新改築に伴う
史料の閲覧利用の一部制限などにつ
いては、前々からも予告しておりま
したが、全般的な公共投資の抑制策
などもあって、今年度の着工はいま
のところ決定しておりません。従っ
て、確定的なことは不明ですが、現
在のところ今年度中は、これまで通
り全史料の閲覧が可能の予定です。
今後とも建設に伴う閲覧制限につ
いては、時期などが確定した時には、
できるだけ早目に改めてお知らせし
ます。

なお、「信濃国松代真田家文書」
については今年度から二カ年間、
「信濃国下海瀬村土屋家文書」につ
いては今年度中、それぞれ目録作
成のための整理作業中につき閲覧を
停止していただきますのでご了承下さい。

〓 関 覧 室 内 〓

◇当館では、所蔵史料をはじめマイクロ
フィルム収集史料および受託史料のう

ち、整理済みのものを、一般の利用に
供するため希望者に対し閲覧を交付付
けています。利用は公開ですから、紹介
などの必要はなく、資格制限もあ
りません。

◇閲覧時間

午前九時三十分より
午後四時三十分まで

但し、土曜日は正午まで

◇休館日

日曜日・祝日・年末年始(12月27日
1月5日)、そのほか当館の行事
に伴う臨時の休館

◇史料のコピーサービスは行なっていま
せんが、閲覧者が写真撮影を行なう場
合は支障のない限り便宜をはかります。

史料館報 第二号
昭和四九年一〇月一五日発行
編集・発行

東京都品川区豊町二ノ六ノ二
国文学研究資料館内
国立史料館
電話(七三三九)一〇六(代)
印刷所 三忠出版印刷株式会社
東京都代田区神田保町ノ
電話(二六二)一四四三番